【別添２】

２１	多治見市立笠原小学校　外１校	27～29

平成２９年度研究開発自己評価書

Ⅰ　研究開発の内容

１　教育課程

（１）編成した教育課程の特徴

①小学校について

第1学年から外国語（英語）科（以下「英語科」という。）を開設し，小・中学校9年間を通じた系統的な英語教育を展開した。これまでの研究開発実践では，Content-based approach in English の手法を参考に，「伝え合う内容を重視し，問題解決的な活動により，伝え合う必然を生み出す指導方法」を開発した。他の教科・領域での既習事項を話題として取り扱うなど本校独自の用件をもたせていることから「笠原型コンテント・ベイスト」と呼んでいる。平成26年度までは，「コミュニケーション能力の素地の段階表（小学校）」，「コミュニケーション能力の基礎の段階表（中学校）」を，それぞれ作成してきた。

平成27年度からは，第1学年より英語科を開設し，低学年においては週1時間（年間35時間），中学年においては週1～2時間程度（年間60時間），高学年においては週2時間程度（年間70時間）の英語科を実施した。加えて，朝の15分間を帯時間の活動（以下，「帯活動」という。）として週2回設定し，英語学習の充実を図った。さらに，英語を「読むこと」及び「書くこと」の指導を導入し，中学校英語科における4技能の総合的な育成を推進した。

②中学校について

中学校においては，特例なく実施した。

（２）教育課程の内容は適切であったか

①小学校について

外国語活動から英語科の指導に転換したことで，言語材料への慣れ親しみや積極的なコミュニケーションの態度の育成を意図した指導から，言語材料の知識・理解の定着と正確な運用を図る指導への移行を図った。教科としての英語科の学習を開始する教育課程を編成・実施したことで，コミュニケーション能力の基礎に一定程度の高まりが見られることが各種学力調査によっても検証できた。また，身の回りのものに興味・関心がより高く，体全体を使って活動することが容易な第1学年から英語科を実施することで，児童が英語を使ってコミュニケーションを図る楽しさや大切さを十分に体験することができた。この授業時数により，各単元の内容も身近なことから外国のことへ，自分の嗜好から生活や将来の夢へ等，学年に応じて発展的に扱うことができた。さらに，ゲーム形式の活動からインタビュー形式の活動，そして Show &Tell 形式の活動へと発展性をもって各学年の単元を構成することができ，児童が過度な負担を感じることなく，十分に英語の音声や基本的な表現及び文字や文構造の定着を図りながらコミュニケーションを楽しむことができた。

②中学校について

採択教科書（三省堂 New Crown English Course）を使用し，学習指導要領に示された内容を「笠原型コンテント・ベイスト」の手法を用いて指導した。教育課程の特例はないため，教育課程の内容は適切であった。

（３）授業時間等についての工夫

①小学校について

小学校においては，第1学年から以下のように英語を実施した。

・第1学年及び第2学年：年間35時間
・第3学年及び第4学年：年間60時間
・第5学年及び第6学年：年間70時間

低学年では，生活科を年間35時間削減し，英語科を年間35時間実施した。中学年では，総合的な学習の時間を年間60時間削減し，英語科を年間60時間実施した。高学年では，総合的な学習の時間を年間35時間削減するとともに，外国語活動を年間35時間削減し，英語科を年間70時間実施した。

第3～6学年における総合的な学習の時間の時数減については，英語科の題材内容において総合的な学習の

時間で学ぶべき視点をも取り扱うとともに，問題解決的な活動を行い，表現力を高めることによって，総合的な学習の時間に期待される資質の向上も図った。例えば，第6学年の単元「中学校ってどんなところ？～世界編～」では，「国際理解」の視点から，様々な国の学校生活について調べ，整理・分析・表現することを通して主体的な問題の解決を促した。同様の方法により，第3～6学年では，英語科の学習全40単元・260時間のうち，13単元・91時間において，「郷土」「健康」「環境」「国際理解」等，総合的な学習の時間で学ぶべき視点を取り扱った。その際，調査，整理・分析・表現等の過程において，問題解決的な活動を展開した。このことにより，総合的な学習の時間に期待される資質の育成が十分図られたと考えている。

②中学校について

学習指導要領に示された授業時間数（各学年，年間140時間）で指導した。

２　指導方法・教材等

（１）実施した指導方法等の特徴

①小・中９年間を通して

ア　「目標の段階表」の作成

平成28年度に作成した「笠原小学校・笠原中学校外国語（英語）科における目標の段階表」（以下「目標の段階表」という。）に「評価時期・方法」を具体的にしたものを加えて完成させた。また，同様に小学校第1学年から中学校第3学年までを学年別に整理した「学年毎の目標の段階表」も完成させた。

目標は，昨年度に引き続き，英語科の評価の4観点（「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」，「外国語表現の能力」，「外国語理解の能力」，「言語や文化に関する知識・理解」）のそれぞれで設定した。今年度は，「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」において，「コミュニケーションへの取組」と「コミュニケーションの継続」の明確な区別が難しいという考えから，それぞれを「積極的に～している。」と「～し続けている。」という文末表現で区別することとし，文言を統一することを基本とした。

「外国語理解の能力」，「外国語表現の能力」については，昨年度同様，岐阜県教育委員会が示している例にならい，「話題・内容・表現（理解）方法・程度」という4つの視点を盛り込み，通して一文となるようにした。「技能」については，「話すこと」を「Spoken Interaction」と「Spoken Production」，「読むこと」を「内容理解」と「音読」に分け，「聞くこと」と「書くこと」を合わせて6つに分類した。

イ　小中兼務教員の活用

研究開発学校として笠原小・中学校で1名の加配教員を得て，小中兼務教員として活用した。小中兼務としたのは，英語科指導における中1ギャップの解消を目的としたからである。したがって，中学校第1学年を担当する英語科教員が小学校第6学年の英語科授業の全時間において学級担任と共にTTを実施することを基本とした。その際，小学校においては，学級担任が主たる指導者（T1）となり，小中兼務教員はサポート（T2）として指導に当たることとしている。今年度，小学校においては，第5学年（週1回），第6学年（週2回）の各2学級で小中兼務教員がT2となるTTを実施した。また，中学校においては，第1学年3学級を担当した。

ウ　学習内容や学習形態の共有

特に，中学校第1学年において，小学校での学習内容，学習形態，言語材料，指導方法，指導教材を積極的に取り入れている。また，学習内容には系統性をもたせているが，発達の段階に応じて変更している。例えば，小学校第6学年で行う「国紹介」は，中学校ではより即興的な要素が強い言語活動を取り入れるなど，小・中9年間を見通したカリキュラム作りを行っている。

②小学校で行った指導方法の工夫

ア　指導計画の見直し

昨年度，小学校での英語科の目標を中学校英語科の目標に準ずるものにするために，評価規準の観点を大きく4つ設定し，それらをさらに細分化し，8項目で評価規準を設定して指導を行った。

しかし，評価しなければならない規準が多く，適切に評価することが難しい場面があった。そこで，今年度は，単元毎に設定している中心となる指導事項に合わせ，重点となる評価規準に絞って評価していこうと考えた。

イ　単元における習熟・定着を図るための指導

習熟・定着を図るために，以下の3点を指導の重点とした。

・単位時間の導入部分において，既習の言語材料を用いて行うことのできる学習活動を仕組むこと。

・単位時間におけるコミュニケーションを図る活動の中間交流会のもち方を改善すること。
・単位時間の終末において，ねらいの達成状況を図るチェックタイムを設定すること。
これらを意識した指導を行うことで，言語材料の定着を図っていくことができると考えた。

ウ　文字指導

文字指導に関わる各学年の目標や扱う言語材料等の指導内容は，昨年度までのものを踏襲した。

今年度新しく取り組んだこととして，特に高学年において，より多く児童が文字に触れる機会をもつことができるように文字指導に特化していない単元においても文字を読んだり書いたりする学習を設定した。

エ　小学校英語科の評価

昨年度，小・中9年間を見通して作成した「目標の段階表」を基に，各単元の評価規準の見直しを図った。また，それぞれの観点について評価の場と方法を明らかにした。

今年度，年度のまとめとなる第4回パフォーマンステストの改善や単位時間の終末において，ねらいの達成状況を図るチェックタイムを設定することを評価の場と方法の改善として行った。

③中学校で行った指導方法の工夫

ア　スタートカリキュラムの作成

中学校第1学年において，小学校との円滑な接続を目指し，生徒が安心して中学校の英語学習に進むことができることを目的として，小学校と同じ教材・教具を用いたり，同じ言語活動を行ったりするスタートカリキュラムを作成している。今年度も昨年度と同様に，指導内容の系統性や指導方法の継続性を大切にして指導に当たった。

教科書題材に入る前の「スタートの時間」については，昨年度同様に，「スタートの10時間」として実施した。今後は小学校外国語科の「書くこと」の指導の完全実施を受け，時間数を短縮していく方向である。これにより，より早い時期に教科書題材に入ることができると考える。

教科書を用いた指導では，今年度もLesson　7までをスタートカリキュラムの対象単元と考え，昨年度に引き続き，教科書で使用される言語材料の確実な定着を図るためにPicture TellingやRetellingを行い，正確性や即興性を高めるための指導を行った。

イ　単元指導計画の改訂

単元における単位時間の役割が分かる「単元構想図」として昨年度作成したものを，よりその役割が明確になるよう「単元指導計画」と改めた。また，昨年度は，「導入の時間」→「基本的な表現を整理する時間」→「正確にアウトプットする時間」→「自分の考えや気持ちを付け加えてアウトプットする時間」→「活用する時間」の5つに分類していたが，その役割をより明確にするために，「正確にアウトプットする時間」を「正確性を高める時間」とし，「自分の考えや気持ちを付け加えてアウトプットする時間」を「即興性を高める時間」へと改めた。さらに，「評価規準」の表記についても見直しを行った。これまでの単元指導計画は，「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」では「コミュニケーションへの取組」と「コミュニケーションの継続」というように，細かな観点8つ全てにそれぞれ評価規準を盛り込んで作成していた。しかし，今回の改訂では，その単元の中で何ができるようになればよいのかを吟味し，生徒の評定に直接関わる観点に絞って評価規準を設定した。また，それを測るための方法や手段を明記し，「評価規準・評価方法」としたことにより，教員間で共通理解しやすい単元指導計画を目指した。

ウ　正確性と即興性を高めるための指導の工夫

昨年度同様，教科書を用いた指導については，正確性と即興性のどちらにより重点を置くかを明確にして指導に当たった。

「正確性を高める時間」では，ターゲットとなる基本表現を正確に運用することを目指した。以下，1単位時間の流れを説明する。まず，教科書の内容理解を行った後で，教科書内容を基本表現を含む4～5文に整理する。そして，その英文が書かれた音読シートを用いて音読練習する。文字を見てつまずくことなく読めるようになった後，それぞれの英文の内容を表す絵を見て説明するPicture Telling 1を行う。次に，教科書の写真や挿絵だけ載せたプリントを用いて，Picture Telling 2を行う。そして最後に話した内容を書きまとめ，ペアで添削した後，教師による添削を行った。このように，「音読」→「Picture Telling 1」→「Picture Telling 2」→「書きまとめ」，と，同じ表現を異なる手法で段階を踏んでアウトプットさせることで，正確性を高めることができた。

「即興性を高める時間」は，「音読」→「Retelling」→「書きまとめ」という流れを基本としている。ある程度の量の物語や説明文を読んで内容を理解した後，教科書本文を音読練習し，教科書の写真や挿絵だけ載せたプリントを用いながら，即興的に教科書内容を要約したり，感想を述べたりするRetellingを行うことで，即興性を高めること

を目指した。そして，話したことを書く活動を行うことにより，即興性と同様に，正確性向上のための指導も行った。

（２）指導方法等は適切であったか

①小・中９年間を通して

ア「目標の段階表」の作成

昨年度作成したものをもとに実践を重ね，定期的にその実践やカリキュラムの見直しを行うことができた。その結果，小・中学校ともに，指導に当たる教師が，各学年で目指す生徒の具体的な姿に加え，小・中9年間を見通して書く単元で身に付けさせる力や指導事項について，共通理解のもとで指導を行うことができ，単元指導計画にもそれらを反映させることができた。これは，特に英語科の免許を所有していない小学校の教員にとって，どの時期にどんな力を付ければよいのかをイメージしながら授業実践を行うことに役立った。

特に小学校においては，「Can-Doリスト」や振り返りシートを作成する際に「目標の段階表」が大きな役割を果たしており，パフォーマンステストの充実にも貢献した。「目標の段階表」については，一通りの完成を見ることとなったが，今後も各学年での実践を受けて，小・中学校で定期的な見直しを行っていく。

イ　小中兼務教員の活用

兼務教員は，週2回（今年度は火曜日と木曜日）小学校で勤務した。その2回の交流の機会は，小・中学校のつながりを強固なものにし，カリキュラムや指導方法，児童生徒の状況を把握することに大きく役立った。小学校での指導内容を把握し，それを中学校英語教員で共通理解したり，逆に中学校での様子を小学校に伝えたりするなど，小・中学校間のパイプ役を果たした。また，中学校第1学年のスタートカリキュラムにおいては，小学校と同じ活動形式や教材を積極的に用いて指導に当たることで，英語科指導における中1ギャップの解消を図ることができた。このことから，小中兼務教員の活用は，概ね効果を上げることができたと考える。

小・中学校の円滑な接続を考えたとき，本来は，小学校第6学年で指導に当たった小中兼務教員が，翌年は中学校第1学年で指導することが理想である。しかし，人事異動等の理由により，過去4年間はそれが実現できず，毎年小中兼務教員が替わっているのが実状である。そのため，新しく小中兼務教員を担当する教員への引き継ぎが大変重要であると考え，新しく小中兼務教員となる教師と前任者とで密に交流を行った。

ウ　学習内容や学習形態の共有

小学校英語科で取り扱った題材を，中学校英語科で発展的に取り扱うようにすることを工夫した。小学校で学習した内容を基盤として，中学校ではより発展的な内容を盛り込めるよう，9年間の指導計画を再編成した。逆に，中学校では自分自身のことについて表現する題材があるため，小学校でも自分自身や身近なことがらについての表現を学ぶ単元を新設した。また，小学校の学習形態を，特に中学校第1学年の授業に取り入れ，生徒が慣れ親しんだ形態で学習できるようにした。これらの共有化を図ることによって，生徒にとって過負荷となることを避けつつ，より発展的な言語活動を仕組むことができた。

②小学校について

ア　指導計画の見直し

今年度行った評価規準の見直しにより，毎単元設定していた8つの観点を4～5つの観点へと焦点化できた。

「コミュニケーションに関する関心・意欲・態度」については，小学校段階でコミュニケーションを継続させることをねらいとする学習がないことから，【言語活動への取組】の1つを規準とすることとした。「外国語表現・理解の能力」については，単元毎に設定した中心となる指導事項に合わせた。「話すこと・書くこと」を中心とする単元では「外国語表現の能力」を「聞くこと・読むこと」を中心とする単元では「外国語理解の能力」を評価することとした。これらに加え，「言語や文化に関する知識・理解」を適宜加え，単元の評価規準を設定した。

このことで，特に単位時間内では評価することに終始することもあった実態が解消され，児童のコミュニケーション活動の様子を観察するだけにとどまることなく，ともに活動することもできるようになった。

イ　単元における習熟・定着を図るための指導

【「単位時間の導入部分において，既習の言語材料を用いて行うことのできる学習を仕組むこと」に関わって】

単位時間の導入部分（5分程度）において，既習の言語材料を用いて行うことのできる学習（“Small Activity”）を実施した。既習表現の習熟・定着をねらい，既習の言語材料を使って活動することを基本としている。発達の段階に応じて，低学年では，英語の歌を歌ったり，カルタやビンゴをしたりすることもあるが，主にコミュニケーション活動を通して，習熟・定着を図っている。その際，特に高学年では，決まった表現だけではなく，例えば，“animal”というテーマを与え，“What animal do you like?” “Do you like dogs?”などの複数の表現を用いてコミュニケー

ションするなど，習熟・定着を図ると同時に，児童の即興性を高めることをねらう学習も設定した結果，徐々に質問の多様性が表れ，豊かなコミュニケーションを図ることができるようになってきた。

【「単位時間におけるコミュニケーションを図る活動の中間交流会のもち方を改善すること」に関わって】
　単位時間におけるコミュニケーションを図る活動の中間交流会のもち方を改善した。これまで，コミュニケーションを円滑に行うための方略に関わる児童のよい姿を取り上げて全体に広めることを優先していたが，「正しく言語材料を使うことができているか」「言いたいことを英語で表現できているか」という視点を大切にし，習熟が不十分であれば，再度，全体や個人での練習の時間を確保した。これにより，児童は，より高い正確さを身に付けて後半の交流に臨むことができるようになった。

【「単位時間の終末において，ねらいの達成状況を図る“Check Time”を設定すること」に関わって】
　授業の終末には，本時のねらいを達成することができたかどうかを確かめるための“Check Time”を位置付けた。『外国語表現・外国語理解の正確さ』を計ることを目的とし，その時間の中心となる指導内容に合わせて，活動を工夫した。直接，評定につながる評価ではないが，児童が理解の程度を自覚したり，達成感を味わったりすることができるようにした。以前と比べ，児童は正確に英語を運用することの大切さを意識することができるようになった。

ウ　文字指導
　特に高学年において，より多く児童が文字に触れる機会をもつことができるようにと文字指導に特化していない単元においても言語材料を読んだり書いたりする学習を設定した。発達の段階に応じて，単語を読むことから始まり，文を書くことまで，様々な文字学習を授業内容に合わせて実施した。具体的には，単位時間で学習し，十分に音に慣れ親しんでいる単語（文字で表したもの）をイラストとマッチングさせたり，“This pizza has _____”の下線部に，単位時間で使用したワードバンクや文字入りイラストカードを手がかりに書き写したりする学習を行った。
　毎時間の積み重ねにより，文字への慣れ親しみが深まってきた。以前に比べると，類推して単語を読もうとする児童や英単語や英文を早く書くことができるようになった児童，アルファベットの形や4線上での位置を意識して書き写すことのできる児童が増えてきた。また，音声でやり取りした内容を文字で確認することができるため，次時以降のより正確な発話へとつながった。

エ　評価
　昨年度と同様に，「コミュニケーションに関する関心・意欲・態度」と「外国語表現の能力（話すこと）の【正確さ】【適切さ】」，「外国語理解の能力（聞くこと）の【適切さ】」を計るためにパフォーマンステストを作成し，前期2回，後期2回の年間4回実施した。
　今年度の改善点として，第1～3回は直前に学習した単元で行った活動形式を用い，身に付けた態度や能力を評価することとした。また，長期の定着状況を計るために，学年のまとめである第4回は，1年間で学習した内容をできる限り網羅して作成した。今後，第4回パフォーマンステストの効果や児童の反応を分析していく。
　また，「外国語表現の能力（書くこと）の【正確さ】」及び「外国語理解の能力（読むこと）の【正確さ】」については，文字学習に特化した単元の後にペーパーテストを行った。「言語や文化についての知識・理解」については，単元の終末に5問程度からなる「チャレンジクイズ」を行い，単元における基本表現に関する知識の定着状況を見届け，評価した。

③ 中学校において
ア　スタートカリキュラムの作成
　今年度も Lesson 7までをスタートカリキュラムの対象単元と考え，小学校とのつながりを意識した指導計画となるよう，指導方法や教材等をより工夫して実施した。教科書で使用される言語材料の確実な定着を図るために Picture Telling や Retelling を行い，正確性や即興性を高めるための指導を行った。また，即興的なやり取りの要素が強い対話活動を多く取り入れたことで，「もっと自分の考えや気持ちを伝えたい」，「どう表現すればいいのだろう」という気持ちの高まりが見られ，英語の授業に主体的に取り組むことができただけでなく，英語を即興的に運用することができるようになった。「スタートの時間」については，小学校のカリキュラムに左右されることが多いため，小中兼務教員を中心として，小学校での学習内容を確実に把握してその都度改良を加えていく必要がある。

イ　指導計画の改訂
　今年度，指導計画を「導入の時間」→「基本的な表現を整理する時間」→「正確性を高める時間」→「即興性を

高める時間」→「活用する時間」の5つに改めたことにより，それぞれの時間の指導内容や指導方法をより一層明確にすることができた。また，単元を通して，「理解・練習する活動」と「伝え合う活動」を効果的に位置付けた。ターゲットとする英文を決め，「伝え合う活動」において繰り返し使用することにより，正確かつ適切に使用することが可能となると同時に，終末の活動に向けて習熟度を高めることができた。

さらに，これまでは全ての観点に設定されていた評価規準を，生徒の評定に直接関わる観点に絞って設定し直し，「評価規準・方法」と改めたことにより，全教員がその単元や1単位時間で，何ができるようになればよいのかを明確にし，そのためにどのような指導を行えばよいのかを共通理解して授業に臨むことができた。そして，それを生徒に示す振り返りシートにも反映し，その単元で目指す姿を焦点化して示すことができた。

ウ　正確性と即興性を高めるための指導の工夫

教科書を用いた指導においては，「正確性を高める時間」と「即興性を高める時間」に区別したことで，それぞれの時間の役割を明確にすることができた。また，これまで Retelling として捉えていたものを細分化した。絵や写真に描かれていることを忠実に表現するものは Picture Telling，内容理解をした後に自分の考えや気持ちを付け加えながら説明するものは Retelling と定義した。この考えから，「正確性を高める時間」において行っていたものは，Picture Telling であるという認識を得た。音読練習でインプットした英文を正確にアウトプットするための活動として，絵や写真を載せたワークシートを用いて，段階に合わせて「Picture Telling 1」と「Picture Telling 2」を行うことで，より正確な表現の定着を図ることができた。また，昨年度から課題としていた質問文やその応答文等，ターゲットとする英文が相手との会話のやり取りが不可欠となる場合においては，スキット発表のようにペアで役割をもたせて Picture Telling することで，問題を解決することができた。

即興性を高める工夫としては，教科書を用いた指導において内容を要約したり，感想を述べたりする Retelling を継続して行った。また，終末の活動においても，即興性を担保できるような言語活動を設定し，終末に向けて類似の活動を繰り返し行わせることで，正確性と即興性の両方を発揮できるような活動を行うことができた。

Ⅱ　実施の効果

１　児童・生徒への効果

（１）英語の技能について

小学校においては，児童の実態を全国の水準と比較するために，『英検Jr. 学校版』を実施した。結果は次のとおりである。

【語句に関する問題の正答率】 第４学年　ブロンズ　85.3%　（学校版全体 88.0%） 第５学年　シルバー　85.3%　（学校版全体 85.5%） 第６学年　ゴールド　65.2%　（学校版全体 65.4%）	【会話に関する問題の正答率】 第４学年　ブロンズ　82.0%　（学校版全体 84.2%） 第５学年　シルバー　85.3%　（学校版全体 75.9%） 第６学年　ゴールド　66.5%　（学校版全体 64.0%）
【文章に関する問題の正答率】 第４学年　ブロンズ　86.3%　（学校版全体 86.7%） 第５学年　シルバー　80.8%　（学校版全体 82.4%） 第６学年　ゴールド　69.9%　（学校版全体 65.2%）	【文字に関する問題の正答率】 第５学年　シルバー　93.5%　（学校版全体 89.1%） 第６学年　ゴールド　63.2%　（学校版全体 70.4%）

第4学年においては，「語句」「会話」「文章」に関する問題で測ることのできる外国語表現・理解の能力について，学校版全受検者の平均よりやや下回る結果であった。「語句」「会話」「文章」の各分野において5問，100％の正答率である一方，極端に正答率が低いものが3問ある。第5学年においては，「語句」「文章」については学校版全受検者の平均よりやや下回ったものの，「会話」「文字」の各分野において，学校版全受検者の平均より上回り，「文章」「文字」の分野で2問，100％の正答率のものがあった。第6学年では，「文字」の分野が学校版全受検者の平均より大きく下回ったものの，その他の分野は平均とほぼ同じかやや上回る結果となった。

『英検Jr. 学校版』の解説には，先進的な英語教育を行っている地域や研究開発校で活用されていると記されており，本校と同様の受検の様子が想定できる。その上で上記の結果を見ると，本校のカリキュラムにある学習内容については，全体に十分に力を付けている一方，学習していないことについて，前後の単語や文脈等から推察して判断するところまでは到達していないことが分かる。今後は，発展的な学習として部分的に初めての単語が混ざっている文章にも触れる機会を設けるようにしていきたい。

中学校において，全国と本校第3学年生徒を比較した結果は，以下のとおりである。

「平成17年度　国立教育政策研究所『特定の課題に関する調査（英語：「話すこと」）』」より§1と§3を抜粋して調査した。全15問中9問において，全国正答率を上回った。

「平成22年度　国立教育政策研究所『特定の課題に関する調査（英語：「書くこと」）』」では，§1～§5まで，全

18問を調査した。全18問中15問において，全国正答率を上回った。

どちらの調査も7月に実施した。平均点を下回る項目は，小中9年間を通して使用する機会が少ない単語や，中学校でのみ扱っている言語材料が多い。

「英検IBA（日本英語検定協会）」は，全学年で同じ調査を7月に実施した。第3学年において，英検3級程度の力がある生徒の割合は50．0％であった。昨年度の42．4％から約8％増加していることから，正確さを高める指導は一定の効果が出ていると考えている。しかし，2年前の58．3％には約8ポイント下回っているため，さらに，正確さを高める指導を検討するとともに，教師の使用する英語の正確性も高めていくよう改善していく必要がある。

（２）児童生徒の意識について

今年度，英語に対する児童・生徒の意識を把握するために，「岐阜県英語拠点校区児童・生徒意識調査」を行った。結果は次のとおりである。

・「英語」が好き　　単位：％

項目	小学校　※（ ）内の数値は平成28年7月				中学校　※（ ）内の数値は平成28年7月			
	第2学年	第4学年	第6学年	全体	第1学年	第2学年	第3学年	全体
好き	66．7	57．1 （40．7）	49．3 （53．2）	60．7 （47．0）	45．8 （42．2）	51．1 （40．5）	69．2 （28．9）	55．7 （36．9）
どちらかといえば好き	28．9	38．1 （37．3）	25．4 （22．8）	29．0 （30．0）	30．0 （42．2）	27．4 （43．0）	25．9 （36．7）	27．7 （40．5）
どちらかといえば嫌い	4．4	4．8 （16．9）	19．0 （20．2）	8．2 （18．5）	17．1 （12．0）	17．9 （11．4）	4．9 （ 25．6）	13．2 （16．7）
嫌い	0	0 （5．1）	6．3 （3．8）	2．1 （4．5）	7．1 （ 3．6）	3．6 （ 5．1）	0．0 （ 8．9）	3．4 （ 6．0）

・「英語」の授業が好き　　単位：％

項目	小学校　※（ ）内の数値は平成28年7月				中学校　※（ ）内の数値は平成28年7月			
	第2学年	第4学年	第6学年	全体	第1学年	第2学年	第3学年	全体
好き	75．6	66．7 （59．4）	54．0 （50．6）	67．7 （55．0）	38．6 （43．4）	31．0 （22．8）	58．1 （27．8）	42．5 （31．3）
どちらかといえば好き	24．4	28．6 （34．4）	23．8 （30．4）	25．0 （32．4）	42．9 （44．6）	47．5 （58．2）	32．1 （46．7）	40．9 （49．6）
どちらかといえば嫌い	0	4．7 （1．6）	19．0 （11．4）	5．8 （6．5）	11．4 （9．6）	16．7 （10．1）	8．6 （ 20．0）	12．3 （13．5）
嫌い	0	0 （4．6）	3．2 （7．6）	1．5 （6．1）	7．1 （ 2．4）	4．8 （ 8．9）	1．2 （ 5．6）	4．3 （ 5．6）

・英語の文字を読むことは楽しい（小学校）単位:％

項目	第4学年	第6学年	全体
楽しい	54．8 （35．9）	55．6 （53．2）	56．1 （44．4）
どちらかというと楽しい	35．7 （41．0）	20．6 （31．6）	27．1 （36．2）
どちらかというと楽しくない	7．1 （23．1）	17．5 （10．1）	11．5 （16．7）
楽しくない	2．4 （0）	6．3 （5．1）	5．3 （2．7）

・英語の文字を書くことは楽しい（小学校）単位:％

項目	第4学年	第6学年	全体
楽しい	59．5 （55．9）	55．6 （48．1）	64．5 （52．3）
どちらかというと楽しい	28．6 （25．8）	27．0 （30．4）	21．2 （27．9）
どちらかというと楽しくない	9．5 （14．6）	9．5 （13．9）	9．7 （13．9）
楽しくない	2．4 （3．7）	7．9 （7．6）	4．6 （5．9）

・外国の人が話しかけてきたら，あなたはどうすると思いますか（中学校）単位：％

項目	第1学年	第2学年	第3学年	全体
英語で答える	79．9	84．5	96．3	87．2
日本語で答える	8．6	3．6	2．5	4．7
だまっている	2．9	4．8	0．0	2．6
その場から逃げる	8．6	7．1	1．2	5．5

①小学校について

平成29年度の「英語が好き・どちらかといえば好き」と回答している児童の割合は，全校児童の平均で89．7％，前年までのデータとの比較として第4学年及び第6学年全体では85．0％（平成28年度は77．0％），また，「英語の授業が好き・どちらかといえば好き」と回答している児童の割合は，全校児童の平均で92．7％，前年までのデータとの比較として第4学年及び第6学年全体では86．6％（平成28年度は87．4％）と，いずれも高かった。楽

しい理由として，下学年では英語を使ったゲームが楽しい，ボランティアでお手本をするのが好き，ショップ形式のやりとりが楽しい等，英語を使うこと以外の楽しさが含まれる。しかし，学年が進むにつれ，新しい英語での表現ができるようになること，よく考えて話したことが相手に伝わったときにうれしい，先生が「この言い方，いいね」と褒めてくれたこと等，より質の高い理由を挙げている。これらの記述から，できるようになったという達成感を味わい，その積み重ねによって自己肯定感も上がっていると考えられる。

また，「英語の文字を読むことは楽しい・どちらかというと楽しい」と回答している児童全体の割合が83．2％（平成28年度80．6％），「英語の文字を書くこと（文字をなぞる，カードを並べる活動を含む）は楽しい・どちらかというと楽しい」と回答している全体の児童の割合が85．7％（平成28年度79．9％）という高い結果となった。平成24年度から始めた文字に慣れ親しむ指導が児童の興味・関心に応じたものになっていること，十分に音声に慣れ親しんだ後に文字に関する指導をするという学習過程が子どもたちに安心感を与え，文字を読んだり書いたりすること自体を楽しめるようになってきつつあることがうかがえる。

②中学校について

7月に意識調査を行い，平成28年の結果と比較した。この調査結果から，「英語が好き・どちらかといえば好き」と答えている生徒の割合は全体で83．4％，「英語の授業が好き・どちらかといえば好き」と答えている生徒の割合は全体で83．4％である。また，「外国の人が話しかけてきたら，あなたはどうしますか。」という問いに対して，「英語または日本語で答える」と答えている生徒は全体で91．9％である。このことから，実際に言語を使用する場面においても，恐れることなく挑戦しようとする態度が育ってきていることが分かる。また，学年が進むにつれ，その数値が増すことから，英語で対応できる語彙が増えるとそのことが自信につながるということも推察される。

しかし，「英語の授業で困ること」の項目の内，「話したいことを話すことができない」「書きたいことを書くことができない」と答えた割合も昨年同様に増加傾向にあることから，即興性を求める活動を多く取り入れたことにより，生徒が困る場面が多くなったことが要因として考えられる。また，正確性を求める指導を行ってきたため，何とかして伝えようとする意欲がありながら，表現の正しさが気になり，伝えたいことをうまく伝えられないという要因も考えられる。今後も，引き続き言語材料を繰り返し指導しつつ，正確性と即興性のバランスを考えた指導を大切にしたい。

（３）英語教育以外への波及効果について

英語教育以外への波及効果を検証するために，多治見市教育委員会が各学校で実施している「hyper-QU（図書文化社）」を活用した。以下がその結果である。

《学校生活プロフィール》

・「学級生活満足度」（学級内に自分の居場所があり，学校生活を意欲的に送っている児童生徒の割合）

小学校		単位：％	中学校			単位：％
全国	第５学年	第６学年	全国	第１学年	第２学年	第３学年
３９．０	６３．０	７２．０	３７．０	５７．０	６０．６	７１．０

・「友だち関係」（友だち関係づくりに積極的に取り組んでいると回答した児童生徒の割合）

小学校		単位：％	中学校			単位：％
全国	第５学年	第６学年	全国	第１学年	第２学年	第３学年
８２．５	８９．１	８９．２	８５．０	８９．０	８８．８	９３．１

・「学習意欲」（学習に積極的に取り組んでいると回答した児童生徒の割合）

小学校		単位：％	中学校			単位：％
全国	第５学年	第６学年	全国	第１学年	第２学年	第３学年
７９．２	８２．５	８４．２	７４．０	８３．５	８１．０	８１．７

・「学級の雰囲気」（学級の雰囲気づくりに積極的に取り組んでいると回答した児童生徒の割合）

小学校		単位：％	中学校			単位：％
全国	第５学年	第６学年	全国	第１学年	第２学年	第３学年
８０．８	９０．８	８９．２	７６．０	８３．０	８４．２	８５．２

小学校においては，「学級生活満足群」に属する児童の割合が，第5学年が63％，第6学年が72％と全国の数値を大きく上回っている。中学校においても「学級生活満足群」に属する生徒の割合は，全学年において全国の

数値を大きく上回り，学年が進むにつれて上昇している。中学校においても「学級生活満足群」に属する生徒の割合は，全学年において全国の数値を大きく上回り，学年が進むにつれて上昇している。さらに，「友だち関係」「学習意欲」「学級の雰囲気」についても，全ての学年で全国の数値を上回っている。この結果から，自ら学習意欲をもつだけでなく，友だち関係づくりや学級の雰囲気づくりに積極的に取り組んでいる結果，学校生活に満足している児童生徒が多くいるということが分かる。

これらの要因として，小・中学校ともに，「笠原型コンテント・ベイスト」の手法を用いたコミュニケーションを図る活動を通して，互いの考えや気持ちを伝え合い，理解し合うことが，学級の仲間関係づくりにも効果的に働いていると考えられる。

２　教師への効果

小学校において，昨年度から英語科としての指導に移行し，教育通信にも評定を付けることにした。それに伴って昨年は小・中9年間及び学年毎の到達目標の作成，単元指導計画の見直し，評価規準の設け方，定着や習熟を図るための指導・援助の在り方，効果的なパフォーマンステストの実施方法，評定の付け方等，多くのことについて職員研修を通して共通理解を図った。その上で，本年度は，これらの内容ややり方を見直したり，細かな部分の調整を行ったりした。7月の第1回運営指導委員会では，英語科の授業を公開し，運営指導委員から多くの指導を受けた。また，全学級担任が夏休み前までにE活動（帯活動）や英語科の授業を公開し，外部指導者から指導を受けた。このことを通して，全職員で単元の内容の改善の方向を共通理解するとともに，指導内容・指導方法を工夫することができた。

小学校の第3学年から第6学年の学級担任及び中学校英語教員に対して，意識調査を行った。意識調査は，岐阜県教育委員会から出されている「外国語活動・英語に関するアンケート」を活用した。

小学校の85．7％の学級担任が，「8割以上の児童が，英語の授業を楽しみにしている」と回答した。また，全ての学級担任が，「ほとんどの児童が，活動に積極的に取り組む姿が見られる」と回答した。さらに，全ての学級担任が「毎時間の授業のあいさつを英語で」行い，「英語の会話のモデルを示すこと」を「ほぼ毎時間行う」と回答している。これらのことから，英語への慣れ親しみがもてるよう，教師が率先して英語の使用を心がけていることが分かる。そして，ほぼ全ての学級担任が，「教材・教具の作成」「担当者や他学級担任やALTとの打合せ」を「十分」または「どちらかというと十分」と回答していることからも，授業前の準備に力を入れていることが分かる。

また，中学校の意識調査結果で，次の項目は全ての英語教員が実行していると答えたものである。

・生徒の興味・関心に即して表現内容の充実を図ることができるよう，適切な教材を与えること
・自分の考えや気持ちを即興的に英語で表現させること
・言語材料が定着するよう反復練習をすること

指導計画を工夫・改善して，定着を図りたい言語材料を繰り返し使用することができるようにしたことが要因であると考えられる。

また，指導計画や指導案の作成，教材・教具の作成がほぼ十分であると中学校英語教員全員が答えた一方で，「小学校との連携が十分ではない。」と答える教員が多い。小学校英語科への教科化にともない，指導計画や指導方法を変更している点が多く，小学校との更なる連携の強化を図る必要性を強く実感したことが要因であると考えられる。

３　保護者等への効果

小・中学校において，共通の保護者アンケートを実施し，保護者の英語教育に対する意識を把握した。小学校で98．6％，中学校で97％の保護者が小学校第1学年から英語を学ぶことに賛成している。その理由としては，

・小さいうちから学習することで，英語に興味をもつことができる。
・早い時期から英語に親しむことで自然に英語が身に付き，将来の職業選択の幅が広がる。
・将来必ず必要になる。
・小学生のうちから英語を習った方が，英語に対する抵抗がなくなり，身に付きやすい。
・外国人との交流で動じず，話したり，文化の違いなどを理解したりする力を学ぶことができる。
・コミュニケーションが豊かで誰にでも話しかけられる所は小さい頃からの英語教育のおかげだと思う。
・国際社会である現在，将来どのような職業についても，英語は役立つと思う。

といった内容が主なものであった。

小・中学校の保護者全体の意見は，以下のいずれかの理由に集約することができる。

・英語に抵抗感がなく，外国の人にも積極的に接することができるようになる。
・グローバル化が進んでいるため，英語は必要である。
・中学校での英語学習にスムーズに入ることができる。

また，今後の英語教育についてさらに期待することとして，小・中学校ともに「外国の方と交流をする機会を設けること」が一番多かった。

なお，反対意見としては，少数（全体の1％）ではあるが，

・英語教育よりまず日本語教育をしっかりやってほしい。

・他教科の負担となるなら反対である。

等，英語教育に比重が置かれることによる他教科に及ぼす影響への懸念の声もあった。

Ⅲ　研究実施上の問題点と今後の課題

１　小学校について

習熟・定着を図る指導として，授業の導入で“Small Activity”を行ったが，より効果的な学習を行うためには，学年間の系統を明らかにし，詳細な“Small Activity”の指導計画を作成する必要がある。どのような学習の段階を踏んでいくことが効果的に言語材料を身に付けさせることにつながるのか，また，即興的にどのような言語材料を使わせていくことが適切なのかを考えていきたい。

また，“Small Activity”と“Check Time”を新たに，単位時間内に位置付けたことで，従来行ってきた学習をそのまま行うことが時間的に難しくなってきた。時間を短縮するために児童の学習過程の整理をし，指導内容や指導方法，活動形態を見直すことで，単位時間における指導過程の見直しをしていく必要がある。

「読むこと」及び「書くこと」の指導に関わって，本来，音声を主として指導すべきところを，文字を提示し，文字を使って指導することに陥ることが度々あった。そのため，文字に対する抵抗感を感じる児童が出てきたり，児童の意識の流れに沿わない授業になってしまったりすることがあった。基本に立ち返り，音声による指導を行い，十分に慣れた後で文字を提示するということを徹底していく必要性がある。

評価内容及び評価方法に関わって，今年度，評価項目の多さから，煩雑になることのないように改善を図ったが，授業での行動観察の方法が徹底されなかったことや，各種テストの難易度，問題数の偏りがあったこと等，客観性，信頼性の観点から，適切な評価を行うための今後に向けての課題が浮かび上がってきた。

２　中学校について

今年度は，小・中学校9年間を見通した「目標の段階表」と，それらを学年毎に整理した「学年毎の目標の段階表」の改定を行い，完成版を作成した。また，それを受け，単元指導計画の「評価規準・方法」を新たに設定し直した。さらに，昨年度までの実践を受けて中学校第1学年から第3学年の指導内容や指導方法について検討し，「正確性を高める時間」と「即興性を高める時間」の役割を明確にして指導を行った。また，その際，これまで行ってきたRetellingの在り方についても見直し，昨年度より課題となっていた，質問文等，やり取りの多い表現においても対応できるものにすることができた。また，かねてより課題となっていた正確性については，少しずつ成果が出てきていると考える。昨年度，7月の「英検IBA」の結果は，3級程度の力を有している生徒が全体の42．4％であり，平成26年度の58．3％と比べると約16ポイント減少していた。今年は50．0％へと伸びを見せており，昨年度の第3学年が卒業間際（2月）に受験した「英検IBA」では，約60％に達していたことから，今年度も同程度の結果を予想している。教師の英語力についても，岐阜県総合教育センターの英語力向上に係る研修を受講したり，授業内で扱う英語表現について教科部会にて交流したりすることで，正確な表現を用いることを意識して授業に臨むように全職員で意識を高めることができた。

今後はこれまでの研究の成果を十分発揮できるように努めていく。スタートカリキュラムについては，小学校での英語科の完全実施を受け，教科書の使用前の「スタートの時間」の在り方の見直しを図っていく。また，正確性と即興性のバランスを大切にしたカリキュラムの工夫や実践を行い，より効果的な指導方法を追究していく。